

言語としての「手話」

—言語学におけるその位置づけ—

山 本 雅 代

I はじめに

2002年10月、「全国ろう児をもつ親の会」は、「私たちの子どもはろう児です」に始まる『ろう児の人権宣言』を発表した。この10の条項からなる宣言は、筆者には、高らかに謳われたというよりはむしろ、切々と訴えられたとの印象を強く与えるが、それは1つには、子を案ずる親の思いがそこに凝縮されているのを見るからである。そして今1つには、ろうの子どもとその親が、当然のことを改めて宣言せねばならないという不条理に対峙している現実を、その条項の1つひとつに読み取るからである。その不条理の1つに「手話」の言語としての位置づけの問題がある。それが本論考の主題である。

『ろう児の人権宣言』は、その条項の1つで「ろう児とろう者の母語は日本手話です」（全国ろう児をもつ親の会、2003、p.4）と宣言している。それは、まさしくそれとは反対の「現状認識」がろう児の親たちの内にあることを物語っている。すなわち、「ろう児とろう者の母語は日本手話であるとみなされていない」現状があるとの認識である。さらに、当会代表の岡本（2003）による条項の解説を見ると、この認識の土台になっているであろう、より根源的な現状認識があるらしいことに気づかされる。

ろう児とろう者には、自然に獲得できる日本手話という視覚言語があります（日本語対応手話ではない）。日本手話は、英語、ドイツ語、フラ

ンス語、中国語、もちろん日本語など、ほかの言語と同等で、遜色のないひとつの言語であることが証明されています。(岡本, 2003, p. 11)

それは、「日本手話は言語とみなされていない」現状があるとの認識である。なるほど、日本手話が言語とみなされていないのであれば、母語とみなされないのも道理である。

本稿では、それらの現状認識、とりわけ後者のより根源的な現状認識の背景、すなわち日本手話、より一般的には「手話」が現実にとどのように扱われているのか、学術的な側面から、その言語としての位置づけの考察を通じて探る。

II 言語としての手話の研究

手話の歴史は長く、それが使用されていたことを示す記録は紀元前5世紀にまで遡ることができると言われ (Marschark, Schick & Spencer, 2006, p. 4)、またフランスでは、18世紀の終わり頃にはすでに手話が言語であると認知されはじめていたとされる (コーバリス, 2008/2002, p. 175)。

しかしながら、その本格的な言語学的研究が始まったのは20世紀半ば、ほんの半世紀ほど前のことである。その先鞭をつけたのはアメリカのろう者の大学、Gallaudet 大学の言語学者 Stokoe と言われる。Stokoe (1960/1978) は、手話を言語学的研究枠組みのもとに体系的に分析し、他の音声言語と同様に、それがまぎれもなく言語であることを示した。加えて書記体系を持たない手話を書き起こし、分析するための表記法を考案した。この貴重な研究成果によって、以後の手話の言語学的研究は大きく前進し、今日に至っている。

Stokoe (1960/1978) の研究は、広範な手話使用者との接触を通して、自身また研究助手が得た経験的知見と、ろう者14名、聴者2名の1,500m 超に及ぶ手話場面の映像データに依ったもので、それらの分析から、手話と音声言語の間には構造的な対応関係があることを見出し、その関係が音素や形態

素、また統語のいずれのレベルにも認められることを明らかにした。ここで少し、その研究の成果を概観したい。

まず、Stokoe (1960/1978) は、手話の「サイン」¹⁾ (sign) は、ちょうど音声言語の形態素がそうであるように、手話における意味の最小単位を為すものであり、3つの相 (aspect)——“TAB” (位置)、“DEZ” (形状)、“SIG” (動き)——から構成されるとした。Stokoe (1960/1978) から一例を借りると、“decide” [決定する] あるいは “decision” [決定] というサインの相の構成は次のようなものである。

decide/decision

TAB: ゼロ-TAB

DEZ: Fの手/二重-DEZ

SIG: 下方動作

TAB (位置) の「ゼロ-TAB」とは、手話を為す場が手話者の身体の前であることを意味する。一方、DEZ (形状) の「Fの手」とは、親指と人差し指で円を作り、他の3本の指をまっすぐに伸ばした形を指す。この形状は英語のアルファベットを指で表す指文字の「F」に該当するため、こう呼ばれる。また「二重-DEZ」とは、同じDEZが2つ用いられること、つまりここでは、右手の「Fの手」と左手の「Fの手」の両方が用いられることを意味する。そしてSIG (動き) の「下方動作」とは手を下方に降ろす動きを表す。

Stokoe (1960/1978) はさらに、各相は、意味の弁別に関与する最小単位となる構成素から成り立っており、これらの構成素はちょうど音声言語の音素と同様の機能を持つとして、それらを「手素」(chereme)²⁾ と命名した。

-
- 1) “Sign” の訳語として「手話形態素」という用語をあてることも可能であるが、後出の “chereme” の訳語「手素」と紛らわしくなるのを避けるため、カタカナそのまま表記している。
 - 2) Stokoe の創出になる用語の日本語訳は筆者によるもの。以後の用語についても同様。なお、“chereme” については、神田 (1994) は「動素」という用語をあてている。

そしてその研究領域を、音声言語の音韻論 (Phonology) と対比させ、「手素論」(Cherology) と名付けている。

先の例を用いて手素を見てみる。サイン “decide/decision” の TAB と DEZ はそのままに、SIG の下方動作を、手を交互に上方、下方に動かす「上下交互動作」に替えると “if” [もし] あるいは “judge” [判断する] という別のサインになり、一方、手を互い違いに前後に動かす「前後交互動作」に替えると “explain” [説明する] というサインになる。すなわち、相のうち、SIG 相の「下方動作」という手素が「上下交互動作」や「前後交互動作」という手素に入れ替わったことで意味の異なる別のサインとなったのである。

<u>decide/decision</u>	<u>if/judge</u>	<u>explain</u>
TAB: ゼロ-TAB	ゼロ-TAB	ゼロ-TAB
DEZ: Fの手/二重-DEZ	Fの手/二重-DEZ	Fの手/二重-DEZ
SIG: 下方動作	→ 上下交互動作	→ 前後交互動作

その一方で、Stokoe (1960/1978) は、手素には、音声言語で同じ音として認知される、よって意味の弁別に係わらない音素の変異形である異音と同様の機能を持つ下位構成素があるとして、これを「異手」(allocher)³⁾ と名付けた。たとえば、Stokoe (1960/1978) が「Eの手」と呼ぶ DEZ は、通常、第二関節で折り曲げた親指以外の4本の指先が、掌に接して折り曲げた親指の背に乗った形状をしているが、人差し指と中指の2本の指先だけが親指に接触している形状も用いられる。この形状の違いは意味の弁別に係わらないため、「Eの手」の異手とされる。

このようにきわめて詳細、綿密な分析が進められた「手素論」に比して、形態論や統語の分析はごく簡単なものに留まっている。それでも、Stokoe

3) 「手素」と「異手」がそれぞれ、音声言語の「音素」、「異音」に該当するのであれば、神田 (1994) でも指摘されているように、「異手」は、「手素」とは別の研究領域、音声言語で言えば「音声学」に該当する領域に属するものと考えるべきであろう。

(1960/1978) はサインによる発話に肯定、疑問、否定の意味を付加する身体や目の動きについて、その機能を分析し、全く同じサインでも、「ほんのわずか頷くか、視線を下げてから上げる、あるいはその両方を一緒に行う」と肯定を、「顔を『開く』、すなわち眉をあげ、目を大きく開け、顎を引くか口元を下げる」と疑問を、そして「頭を振る」と否定を意味することを明らかにしている (p. 35)。これは一見、音声言語話者が発話時に用いる身振り・顔の表情のようにも見えるが、Stokoe (1960/1978) は「手素的には同一ながら、統語的には大きく異なる形態素を弁別しているのであるから、ここでは厳密な意味で言語学的なものに違いない」(p. 30) と単なる身振り・顔の表情とは区別し、手話の統語構造解明に資するものとして位置づけている。

こうして Stokoe (1960/1978) の研究に始まる本格的な手話の言語学的分析は、この半世紀の間に、言語としての手話の構造や統語の解明に多くの知見をもたらした。この間の研究の展開やその成果については、神田 (1994) に詳しいので、その詳細はそちらに委ねることとして、ここでは手話-音声言語のバイリンガリズム研究からの知見の一端を垣間見たい。

バイリンガルはしばしば発話の途中で使用言語を切り替える「コードスイッチング」(以後 CS) を行うが、この切り替えは、恣意的で無秩序に行われるものではなく、規則の制約に従って行われる言語活動であることが、これまでの多くの研究によって明らかにされてきた(たとえば、Auer, 1995; Blom & Gumperz, 2000/1972; Lanza, 1997; Meisel, 1989; Myers-Scotton, 1993a, 1993b; MacSwan, 1999; Paradis, Nicoladis & Genesee, 2000; Poplack, 1979/1980/2000)。そして、このことは音声言語間の CS に特化されたものではなく、視覚と聴覚というモダリティの異なる言語間の CS においても、すなわち手話と音声言語の間に行われる CS についても言えることを、Berent (2004) は手話-音声言語のバイリンガルによる CS のデータの考察を通して明らかにした。

- (1) PRO:1 FEEL ...^(a)YES TRUE HAVE COMMUNICATION PROBLEMS
 YES INTERPRETER YES SOMETIMES PAINFUL AND-SO-FORTH
 BUT PRO:1 ^(b)FEEL DEAF PERSON ^(c)DET-If HAVE RIGHT (correct
 herself) POSITIVE PERSONALITY RIGHT PERSONALITY LIKE-THAT
 CAN INFLUENCE HEARING PERSON PRO:1 ^(d)FROM MY EXPERI-
 ENCE PRO:1 KNOW-THAT
 SOME DEAF PEOPLE ^(e)DET-If DOESN'T-MATTER THROUGH
 INTERPRETER
 WOW REALLY MAKE IMP-BIG IMPACT INFLUENCE DEAF (correct
 herself)
 HEARING PEOPLE

PRO:1: 手話による一人称

DET-If: 手話者の左側に設定した指示物を指し、限定詞の機能を果たしている

うん、確かに、コミュニケーション上の問題はあると……思うし、うん、通訳なんかを通してというのは苦勞だったりすることも時にはあるけど、でも、もしろう者が正しい……前向きな性格だったら、聴者に影響を及ぼすことができると思う。自分の経験から言うんだけど、たとえ通訳頼みであっても、ろう者の中にはろう……じゃなくて聴者に大きなインパクトを与えることができる人たちがいるんだよ。

(Berent, 2004, p. 326 より引用の上、筆者が加筆/訳も筆者)

(1)は、アメリカ手話-英語のバイリンガルが、手話（大文字で表記）を用いながら、同時に英語でも発話（＝マウシング mouthing、点線で表記）しているもので、マウシングの開始（+M で示された位置）と停止（→で示された位置）がCSの生起している箇所になる。

Berent (2004) は、たとえば(a)、(b)、(d)のCSは機能的な主要部制約（The Functional Head Constraint、以後FHC）（Belazi, Rubin & Toribio, 1994）によって説明しようと主張する。FHCとは「機能的な主要部によってf-選択⁴⁾される補部の言語素性は、他のすべての弁別的素性と同様に、その機能的な主要部の対応する素性と一致せねばならない」（Belazi, Rubin & Toribio, 1994, p. 228, 訳は筆者）とされる制約で、より具体的に換言すれば、機能的な主要部（法助動詞 MOD/AUX、否定詞 NEG などの屈折要素 INFL や補文標識 COMP、決定詞 DET、数量詞 QUANT/NUM）（Abney, 1987; Belazi, Rubin & Toribio, 1994; Tribio 2001）とその補部（動詞句 VP、屈折句 IP、名詞句 NP）とは同一の言語でなければならない、すなわち、機能的な主要部と補部の間では言語を切り替えることはできないことを意味している。よって、Berent (2004) は、(a)、(b)、(d)でCSが生起しているのは、いずれもが機能的な主要部と補部との関係にはない箇所、FHCに抵触しないためと説明する。

また、Berent (2004) は、それ以外のCSについても、当該言語間の文法的な不一致によって説明が可能であるとし、たとえば(c)や(e)では、限定詞の位置が英語では名詞の前、アメリカ手話では名詞の後となり、両者の間で異なるために文法的な破綻をきたし、CSが生じていると説明する。

本節では、Stokoe (1960/1978)、Berent (2004) を駆け足で概観したが、いずれの研究でも、その成果が語るのは、手話は、音声言語と同様に、まぎ

4) Abney (1987) は、文を構成する文法的要素の内、名詞や動詞などの「語彙的範疇」との対比で、「非語彙範疇」と呼ばれるものを「機能的要素」(functional elements)と呼び、C(補文標識)とI(屈折要素)をその典型例とした。そして機能的要素の主たる特質として、選択する補部の数がただ1つであることをあげ、CはIP(屈折句)を、IはVP(動詞句)を選択するとした。そして、この「機能的要素とその補部との間の統語関係」(Abney, 1987, p. 38)を「機能的選択」(functional selection=f-selection=f-選択)と呼んだ。

れもなく言語だということである。

Ⅲ 手話はいかに認知されているか

言語学的な分析を通して、手話はまぎれもなく言語の1つであることが明らかにされてきているのにも関わらず、どうも、そのことが未だ広く認知されていないらしいことが、『ろう児の人権宣言』、あるいはその背後にあると思われるろう児の親たちの現状認識に読み取れることは、すでに述べた通りである。

しかし、さらに周囲を見回すと、この現状認識は独りろう児の親だけのものではなく、手話の研究者や推進者の間にあっても広く共有されているらしいことに気づく。それは彼らの著書にしばしば、手話が言語である旨の断り書きを認めるからである。ためしに手元の著書を何冊か括ってみれば、すぐに以下のような断り書きが拾える。

そうした状況下で、手話（日本手話）が1つの自然言語であり、言語学の研究対象であることを訴えるべく……。 （神田，1994，pp. i-ii）
まず初めに、“手話はひとつの独立した言語である”とおさえておいてください。 （草の根ろうあ者こんだん会，1998，p. 7）
手話は音声言語同様に、自然言語のひとつである。

（米川，1998，p. 20）

ところで、みなさまには、「手話は言語である。」ということを実感していただけるでしょうか。 （鈴木，2001，p. 3）

ひとつは「ろう者の手話は独立した言語である」ということであり……。 （イ，2006，p. 10）

手話とは何かといえは、それは言語です。

（全国手話通訳問題研究会，2007，p. 52）

ろう児の親を始めとして、手話研究者や推進者が、このように繰り返し言

語であると断らねばならない手話は、一体、言語学の世界ではどのように捉えられているのであろうか。本節では、これまでの研究で明らかになった手話に関する言語学的事実がどの学問領域よりもいち早く了解され、認知されるはずの言語学にあつて、手話がどのように扱われているのか、その言語としての位置づけを、言語学の基礎的知識を解説する概説書の中に探してみる。ここでは、何を以て言語とみなすかという根源的な問題に触れることになる。

言語学の概説書を紐解くと大概そこに、世界の言語数として3,000から8,000ほどの数が見つかる。

なぜ、提示される言語数がこれほど大きく違うのか。それは、概説書の執筆者が各々引用する元データの出所が異なるために違いないが、なぜ、その元データの数がこれほどまでに異なるのか。

そこにはいくつかの理由が考えられるが、1つには、交通手段の発達により調査地が拡大し、より広範な言語採集ができるようになった、あるいはまた言語調査に従事する研究者数が増加し、より多くの、そしてより正確な情報が入手できるようになったといった調査方法上の進展があげられよう。また1つには、新しい「言語の誕生（発見）」があつたり、話者数減少の最終段階としての「言語の死」があつたり、あるいはまた、クラウス（2002）が以下に指摘するような、共通語（リング・フランカ）の普及による方言の理解力低下によって生じる言語数の「擬似的増加」があつたりと、言語それ自体の動態変化をあげることもできよう。

リング・フランカとの二重言語使用により、広い方言連続体のなかで理解し合い相互に影響しあうことができなくなり、結果として、伝統的に備わっていた方言を理解する能力の幅が縮まり、言語変化ではなくたんに社会言語学的な変化によって、これまで機能的にひとつの言語であったものが今や十数個の言語になっているということもありうる。（クラウス、2002、pp. 175-176）

この引用が示唆するように、なぜ言語数が異なるのかとの問いは、言語同定の問題、すなわち、何を以て「言語」とみなすかという、本質的な問いを誘発する。実は、この何を以て「言語」とみなすかという言語同定の問題に、筆者は2つの意味を込めている。第1には、上記のクラウス（2002）の例に通ずるもの、すなわち、何を以て、ある言語を他の言語からあるいは方言から区別するかという境界線の線引きである。境界線の引きようによって言語数は大きくぶれる。第2には、より根源的なこととして、上述の「言語の誕生（発見）」という文言によって示唆したもの、すなわち、何をして言語とみなすのか、言語と判断するための要件である。言語の定義に外れたものは当然ながら、言語数には算入されない。さて、手話は、この3,000～8,000とされる言語数に数えられているであろうか⁵⁾。

言語そのものを研究の中心課題に据える言語学では、言語が言語であるための要件として、どのようなものを備えている必要があると考えているか、1978年から2004年に国内で出版された典型的な言語学の概説書（翻訳本含む）8種（A～H）⁶⁾を括ってみる。するとほどなく、ほぼすべての書で、人間言語の要件の1つに音（声）を用いることを含めているのがわかってくる。たとえば、Aは人間の言語であるための要件を3点あげ、その1つに音声の使用を含め、Bも人間の使用する言語を定義するための特性として、6つの

5) Skutnabb-Kangas (2000) をして、「これまでで最も包括的で総合的（かつオンラインで検索可能）な世界の（大部分が音声の）言語のリスト」（p. 32、訳は筆者）と言わしめた *Ethnologue* (13版) のオンライン最新版 (15版) (Gordon, 2005) では、世界の言語数が6,912言語、うち119言語がろう者の手話とされている。

6) 本論の目的は、特定の概説書を批判することではないため、ここで概覧した概説書は単にA～Hと表示した。なお、これら概説書8種の内7種が世界の言語数を紹介しているので、参考までにその数を以下に示す。

- ・ A : 約3,000、5,000、8,000
- ・ B : 3,000～7,000
- ・ C : 3,000以上
- ・ D : 4,000～8,000
- ・ E : 6,000～7,000
- ・ F : 3,000～5,000
- ・ G : 3,000～8,000

他の特性と共に音を材料とすることをあげている。さらにCも恣意性、経済性／余剰性などと共に、分節されうる音を用いることをその特徴に含めている。Dは言語を音声信号の体系であるとして、それは世界のどの言語についても同様であると明言している。加えてEも人間の言語であればいずれも、音声をその基本的特徴の1つに持つと述べている。

音（声）を言語の基本的要件の1つと位置づける、これらの概説書に従えば、手話は言語とは言えないことになる。事実、Aではアメリカ式手話を「人間言語の代用」となるような伝達手段の一例として紹介している。かつて、ブルームフィールド（1962/1993, p. 184）はろう者の用いる手話を言語の単なる派生物であるとしたが、Aではそれよりもさらに言語から遠のいた存在として位置づけられている。一方、Fは手話を言語として認めるものの、言語の傍流との扱いで、基本的には言語は音（声）になるものとの立場をとり、上記の概説書と肩を並べている。

一方で、上記の概説書と一線を画し、明確に手話を1つの言語と位置づけているのがGとHの2種である。Gは音を人間言語の主要な特性とは認めず、音を持たない手話も言語であると明快である。Hは、注釈の中ながらも、音を用いない手話も人間言語であることを明記している。

さて、これら概説書に著された言語の要件を概観して、我々はそこに一体何を見るのか。それは、これまでの研究成果を踏まえて、本来、他のどの学問領域にも先駆けて、手話を言語と位置づけるべき「言語学」が、実は、言語とは音（声）になるものとの旧来からの言語観に縛られて、あるいは米川（1998）が指摘するように、言語学者の無関心から、手話を言語として認知し損ねている姿である。

確かに、ここで概観した概説書はわずか数種にすぎない⁷⁾。しかしながら、

7) これらの概説書は、たとえば、大学の言語学関連科目の教科書として使用されることが多く、また所蔵する図書館の数も少なくない。大学図書館等の所蔵図書を検索するNACSIS Webcat（国立情報学研究所の総合目録データベース WWW 検索サービス）を用いて、各概説書の所蔵図書館数を検索すると、最も少ない概説書で70、最も多い概説書で292とされ、2008年3月末日現在データベース参加機関数1,208（国立情報学研

初学者に言語とは何かを語るべく書かれる概説書が、言語学において広く了解されている言語観に強く影響を受けているであろうことは想像に難くない。Stokoe 以前を指して、中野（2002）が「長い間、聴覚一音声の伝達方法をとる音声言語のみが言語であるとされてきた」（p. 18）と述べ、神田（1998）が「言語とは音声言語のことだという言語学の“常識”が手話研究を遅らせたことは確かである」（p. 27）と指摘したように、GやHに著された言語観はむしろ例外的なものであり、言語は音（声）との言語観が、今日に至ってなお、さして変わってはいないことを我々は知ることとなった。ろう児の親、また手話研究者、推進者の間で共有されているらしい現状認識の源の1つをここに見出したと言えよう。

IV おわりに

本稿では、ろう児の親や手話研究者、推進者の間で共有されているらしい「日本手話は言語とみなされていない」との現状認識の背景を、言語学における手話の位置づけの中に探ってみた。そこから見えてきたのは、言語とは音声言語なりとの旧来からの言語観に縛られた、あるいは手話に無関心な言語学の姿であった。Stokoe（1960/1978）による手話の言語学的分析から半世紀が経過しようとする今日に至ってなおの現実である。ろう児の親が「ろう児とろう者の母語は日本手話です」と宣言し、手話も言語の1つであると訴えねばならなかった不条理から解放されるには、まだしばらく時を要するであろうことを示唆する現実でもある。

しかし、本稿を閉じる前に、一条の光明を見出すべく、筆者の実施した質問紙調査⁸⁾（山本、未公刊）の結果をいくつか報告したい。この調査は大学生を対象に、手話に関するいくつかの問いに回答を求めるもので、有効回答

究所、2009）で算出すると、それぞれ全体に占める割合は6%、24%である。こうした状況を勘案すると、そこに著された言語観が影響を及ぼしうる範囲、度合いは決して小さくはないことが推測される。

8) 本調査にあたっては、筆者の勤務校である関西学院大学の16名にも及ぶ先生方のご協力を得た。ここで改めて、その協力に対し謝辞を表したい。

1,795件を得た。集計の結果、回答者の54%が手話に興味を持っており、70%が大学の通常の授業の1つとして手話の授業を開講することに賛同し、51%が実際に開講されれば学んでみたいと考えていることがわかった。そして、開講することを是とするについての理由として、少なからぬ数の回答者が手話がろう者とのコミュニケーションの媒介になることを指摘し、また少数ながらも手話が1つの言語である旨を明記した者たちがいた。

ろう児やその親が先の不条理から解放される日は、存外、学界の現実が示唆するほどには遠い先のことではないのかもしれない。

(筆者は関西学院大学商学部教授)

引用文献

- Abney, S. (1987). *The English noun phrase in its sentential aspect*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, MA.
- Auer, P. (1995). The pragmatics of code-switching: A sequential approach. In L. Milroy & P. Muysken (Eds.), *One speaker, two languages: Cross-disciplinary perspectives on code-switching* (pp. 115-135). Cambridge: Cambridge University Press.
- Belazi, H. M., Rubin, E. J., & Toribio, A. J. (1994). Code switching and X-bar theory: The functional head constraint. *Language Inquiry*, 25(2), 221-237.
- Berent, G. P. (2004). Sign language-spoken language bilingualism: Code mixing and mode mixing by ASL-English bilinguals. In T. K. Bhatia & W. C. Ritchie (Eds.), *The handbook of bilingualism* (pp. 313-335). MA: Blackwell.
- Blom, J-P., & Gumperz, J.J. (2000/1972). Social meaning in linguistic structure: Code-switching in Norway. In W. Li (Ed.), *The bilingualism reader* (pp. 111-136). London: Routledge.
- ブルームフィールド, L. (1962/1993). 『言語』(三宅鴻, 日野資純). 東京: 大修館書店.
- コーバリス, M. (2008/2002). 『言葉は身振りから進化した: 進化心理学が探る言語の起源』(大久保街亜訳). 東京: 勁草書房.
- Gordon, R. G. Jr. (Ed.). (2005). *Ethnologue: Languages of the world, Fifteenth edition*. Dallas, Tex.: SIL International. Online version: <http://www.ethnologue.com/ethno_docs/distribution.asp?by=family>. アクセス日 2009年3月29日.
- イ, ヨンスク (2006). 「手話言語と言語政策」. 小嶋勇(監)『ろう教育が変わる: 日弁連「意見書」とバイリンガル教育への提言』(pp. 9-39). 東京: 明石書店.
- 神田和幸 (1994). 『手話学講義: 手話研究のための基礎知識』. 東京: 福村出版.
- 神田和幸 (1998). 「手話とはどういう言語か」. 『月刊言語』, 第27巻第4号 (pp. 26-33).

- 国立情報学研究所 (2009). <<http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/archive/stats/cat/transition.html>>. アクセス日 2009年5月22日.
- クラウス, M. (2002). 「言語の大量消滅と記録: 時間との競争」. 宮岡伯人, 崎山理(編)/渡辺己, 笹間史子(監訳)『消滅の危機に瀕した世界の言語: ことばと文化の多様性を守るために』(pp. 170-206). 東京: 明石書店.
- 草の根ろうあ者こんだん会(編). (1998). 『アクセス! ろう者の手話: 言語としての手話入門』. 東京: 明石書店.
- Lanza, E. (1997). *Language mixing in infant bilingualism: A sociolinguistic perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- MacSwan, J. (1999). *A minimalist approach to intrasentential code switching*. New York: Garland.
- Marschark, M., Schick, B., & Spencer, P. E. (2006). Understanding sign language development of deaf children. In B. Schick, M. Marschark & P. E. Spencer (Eds.), *Advances in the sign language development of deaf children* (pp. 3-19). Oxford: Oxford University Press.
- Meisel, J. M. (1989). Early differentiation of languages in bilingual children. In K. Hyltenstam & L. K. Obler (Eds.), *Bilingualism across the lifespan: Aspects of acquisition, maturity, and loss* (pp. 13-40). Cambridge: Cambridge University Press.
- Myers-Scotton, C. (1993a). *Duelling languages: Grammatical structure in codeswitching*. Oxford: Oxford University Press.
- Myers-Scotton, C. (1993b). *Social motivations for codeswitching: Evidence from Africa*. Oxford: Oxford University Press.
- 中野聡子 (2002). 『大人の手話 子どもの手話: 手話にみる空間認知の発達』. 東京: 明石書店.
- 岡本みどり (2003). 「私たちの望むろう教育」. 全国ろう児をもつ親の会(編)『ぼくたちの言葉を奪わないで!: ろう児の人権宣言』(pp. 10-18). 東京: 明石書店.
- Paradis, J., Nicoladis, E., & Genesee, F. (2000). Early emergence of structural constraints on code-mixing: Evidence from French-English bilingual children. *Bilingualism: Language and Cognition*, 3(3), 245-261.
- Poplack, S. (1979/1980/2000). Sometimes I'll start a sentence in Spanish *y termino en Español*: Toward a typology of code-switching. In W. Li (Ed.), *The bilingualism reader* (pp. 221-256). London: Routledge.
- Skutnabb-Kangas, T. (2000). *Linguistic genocide in education: Or worldwide diversity and human rights?* Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Stokoe, W. C. (1960/1978). Sign language structure: An online of the visual communication systems of the American Deaf. *Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, 10(1), 3-37. (2005, Oxford University Press) / (1978). Sign language structure: The first linguistic analysis of American sign language (newly revised). Silver Spring, MD: Linstok Press.
- 鈴木康之 (2001). 『手話のための言語学の常識』. 東京: 全日本ろうあ連盟出版局.

- Tribio, A. J. (2001). On the emergence of bilingual code-switching competence. *Bilingualism: Language and Cognition*, 4(3), 203-231.
- 山本雅代 (未公刊). 「『手話』に関するアンケート調査結果」.
- 米川明彦 (1998). 「これから手話を学ぶ人のために」. 『月刊言語』, 第27巻第4号 (pp. 20-25).
- 全国ろう児をもつ親の会(編). (2003). 『ぼくたちの言葉を奪わないで!: ろう児の人権宣言』. 東京: 明石書店.
- 全国手話通訳問題研究会(編). (2007). 一番ヶ瀬康子(監修) 『聴覚・言語障害者とコミュニケーション (新訂版)』. 東京: 一橋出版.